

教科または教職科目（教育学部 2 回生～4 回生）「教育実践演習 I・II・III」

授業者：白松賢・山崎哲司・日野克博・東賢司

授業評価担当者：白松賢

I. 授業の概要

本講義は、実習（地域連携実習・教育実習等）における体験をもとに、専門的知識・理解及び技能と結びつけ、省察し、資質能力の向上を目指している。ディプロマポリシーでは、「実践から学び、自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた学習ができる。」を重点的な課題としてカリキュラム上の位置づけを意識しており、地域連携実習に参加した体験をもとに、2 回生～4 回生の異学年が参加する演習形式の授業である。

- 第一回 オリエンテーション
- 第二回 初任者教員に学ぶ (GT)
- 第三回 ティーチングポートフォリオを創ってみよう
- 第四回 学校ボランティアの安全管理
- 第五回 ケースメソッド 1：専門的知識・技能と照らしあわせて考えよう（特別活動）
- 第六回 「省察の技法」：自分で自分を成長させる教師へ
- 第七回 ケースメソッド 2：専門的知識・技能と照らしあわせて考えよう（日野）
- 第八回 トピック：モンスターピアレント対策講座
- 第九回 ケースメソッド 3：子どもの発達（言葉と文字：東）
- 第十回 教員養成カリキュラム・シンポジウム
- 第十一回 教育実践力養成講座 (GT)
～初任者教員の授業研究～
- 第十二回 教育実践力要請講座 (GT)
～算数指導の TT/TA のために～
- 第十三回 教育実践力要請講座 (GT)
～実習経験と教員生活～

第十四回 教育実践力要請講座 (GT)

～学級経営力養成講座～

第十五回 まとめ

～地域連携実習引き受け校から～

II. 授業の受講状況について

本授業は、地域連携実習の参加を前提とし、授業内容では実習経験と照らし合わせながら受講しないと理解が困難な内容が多く組み込まれている。そのため、授業オリエンテーション時には 90 名近くの学生の登録があるが、実習経験をもとにしたティーチングポートフォリオやプランニングを課した際に、実習経験の少ない学生は困難さを感じ、受講を取りやめるものもいる。オリエンテーションと課題の提示以降は、60 名弱の受講となるが、受講者のほとんどが出席率 90%を達成している（2 名のみ、85%）。さらに課題レポート提出率は 100%であった（提出期限遅れは 3 名）。さらに今年度、他学部学生 2 名が受講している。平成 20 年度「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」に採択された「教職課程の DP に基づく全学的教員養成改革」の取り組みから、他学部からも学生を地域連携実習に受け入れ始めたが、教職 DP の取り組みの成果がみられつつある。

III. 授業評価（成果と課題）

学生からの授業評価は、成績評価に関係しない自由ドキュメント記述法で行った。授業最終回終了後に配布した感想シートで記述してもらった。なお一部の学生には、感想についてのヒアリングも行った。

(1)評価の高い項目

①多角的な視点からの実践省察

- ・様々な先生たちの話を聞き、本当に多くのことを学ぶことができました。どの先生方の話も興味深く、一言も聞きもらすまい、と必死になって講義を受けました。(2回生)
- ・教育実践演習では、現職の先生方のお話を聞いたり、保護者の方のお話を聞いたり、大学の先生方のお話を聞いたりして、いろんな年齢、職業、立場の方からお話を聞くことができ大変勉強になりました。(2回生)

②意見交換やディスカッション(異学年)

- ・この講義は私にとってとても刺激的なものでした。(中略)講義を受けている人たちは、教師になるという目標を持って様々な実習に参加されている人がとても多く、特に3,4回生の方は教育に対する考えがとても深く、(中略)、4月から教師になれる4回生の思いを聞くことができ本当に良かったと感じています。(2回生)
- ・この講義の中で一番自分の学びになったことは、グループワークでの話しあいだと感じています。(中略)自分と同じように教師を目指している人たちの考えを聞いたということがすごくよかったです(3回生)

③ラーニングポートフォリオ

ここでいうラーニングポートフォリオは学校現場で用いられている寄せ集め式ポートフォリオではなく、ライフヒストリー再構成型のラーニングポートフォリオである。

- ・パワーポイントや自分の学習のこれからのプランニングをすることは大変だったが、(中略)、今回、しっかりと自分を見つめなおして教育観を考えたことで、これからは自信を持って自分の教育観を伝えることができるし、これから小学校に行くときのめあてのようなものもできてよかった。(3回生)

この③に関しては、「きつかった」「たいへんだった」という声も多かったが、課題を提出した学生には、大きな自己省察の機会となっており、同時に「良かった」という声が併記されており、単位の実質化に伴う時間外学習量を意識した課題であったが、一定の適切さをもっていたといえよう。今回は、ヘルシンキ大学(フィンランド)の取り組みを枠組みとして、教師教育における質的研究をリードしている Goodson の手法を簡易化した。その成果として大学における経験と学びの省察を通して、今後の自己教育課題を明らかにし、その解決の方向性を探究することで、教職 DP の達成に寄与したと考えられる(平成 21 年度日本教育大学協会研究集会において学生の成果報告を行った)。また教員採用試験を受験した 4 回生からは、「自分たちが 2-3 年の時に経験しておきたかった」という声があったが、教員採用試験で細やかな面接を経験した学生の経験と深く関わっている。

(2)カリキュラム上の課題

①中学校・高校教員のゲストティーチャー

この講義では、小学校教員を主としてゲストティーチャーとして招くことが多かったが、今後、特別支援学校・中学校・高校で大学における教員養成に協力的な先生方とのネットワークを構築する必要がある。

②教員志望学生のフォローアップ

学生の感想から、「教員を志望する学生同士のディスカッション」が評価されていることは、反面、愛媛大学の教員養成カリキュラムに対して、教員志望者の不満があることを意味していると解釈される。教員志望者のみのディスカッションやグループワークをどのようにカリキュラム上、保障するかが大きな課題とも考えられうる評価結果であった。